琉球大学学術リポジトリ

ツツジ　ーうつくしい野生植物を愛培しようー

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学農家政学部
	公開日: 2011-07-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 諸見里, 秀宰, Moromizato, Shusai
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21044

ツ　ツ　ジ

── うつくしい野生植物を愛培しよう ──

1. あらまし

花一ぱい運動が提唱されるようになってから、花木類に異常な関心が持たれるようになった。殊に初春の野山を彩どるツツジ類は花が美しいだけでなく、葉も樹姿も優れているので古くから人々に愛培されてきた。最近はツツジ類の鉢物が本土から輸入され高価で取引されている。

ツツジ類は日本原産の植物であるが現在では東洋でも欧米でも広く栽培されている。殊にアメリカには1919年にE. H. Wilson 氏によって久留米より120品種がアーノールド樹木園に導入されて以来栽培および育種が大規模に行なわれ広く人々に親しまれている。現在のアメリカ東南部のほとんどすべてのツツジは元来日本の品種であることは余り知られていないが誇るべきことである。このようにアメリカは勿論、ヨーロッパ諸国，オーストラリア，ニュージランドにいたる諸国で植え込み，ボーダー，ロックガーデンに，また，鉢植えにして室内装飾用に広く愛培されている。

本土でよく知られ愛培されている大輪咲きのリュウキュウツツジは，1692年頃すでにその名の記載があり原産不明の園芸種とされているが，中国，四国地方のツツジ類の雑種に由来すると考えられている。いずれにしても本土原産のツツジである。本土ではリュウキュウツツジといえば一種をさしているが，アメリカでは，ケラマツツジ，キシツツジ，モチツツジおよびそれらの雑種に由来する大輪性のツツジ群をさして，リュウキュウツツジ（Ryukyu Azaleas）と呼んでいるようである。このように琉球名のついたツツジが本土でもアメリカでも知られていることは喜ばしいことである。

琉球には次の8種類のツツジ類が知られている。

(イ)ケラマツツジは，奄美，沖縄に分布する琉球原産のツツジで，国頭，中頭，久米島，慶良間の山地に自生している。沖縄では3月頃大輪性の帯赤色の花を沢山つけるツツジで，開花期間が長く美しいため広く知られ愛培されている。本種は17世紀末には既に江戸で栽培されていたようである。（写真参照）

(ロ)サクラツツジは台湾および琉球列島から九州まで分布している。国頭，中頭，久米島の山地に自生している。桜色の美麗な花をつけるのでサクラツツジの名がある。沖縄では2月頃開花し花は桜色の地に赤色の斑点をつける。小さな常緑の喬木または灌木でE. H. Walker によれば高さ10メートルに達するということである。

(ハ)サキシマツツジは石垣西表の山地に自生し，帯赤色の大輪種で葉や茎が見えなくなる程沢山の花をつける。筆者の観察したもので高さ4メートルに達するものがあった。本種は主として石垣，西表地方で愛培されている。

(ニ)セイシカは台湾および石垣，西表の山地に自生しているツツジで，桜色の地に紫色をおびた大輪の美しい花をつける。花は石垣島では 3月頃咲き直径6 *cm*に達する大輪種である。本種は高さ4メートル以上に達する小喬木である。

(ホ)トウサツキは台湾，琉球列島に分布し，国頭，伊平屋，石垣，西表の山地や河岸の森林内に自生している。5月頃桃色～帯赤色の花をつける。花は直径4～5 *cm*位である。本種は高さ4メートル以上に達する小喬木で前4者のツツジ類に比較してきわめて葉が小さいため容易に識別できる。本群のツツジ類は5月に開花するので早月の名がある。

その他久米島に産するクメジマツツジ，尖閣列島に産するセンカクツツジ，カザンジマなどがある。このように吾々の郷土沖縄には，どこにだしても恥づかしくない美しいツツジ類が自生している。この美しい野生の植物を利用して生活を美化すべく，大いにその愛培に心掛けると共に更に進んではそれらの育種をも行ないより素晴らしい品種をつくりあげたいものである。

2. 栽培のポイント

与那演習林の創設当時は沢山のツツジ類が自生

していたが，毎年多数の人々が訪れるせいか次第にその数が減りつゝあり近い将来は育苗増殖しなければいけない現状である。

ツツジ類の栽培は実生育苗による方法と山掘苗を利用する方法があるが，後者が一般的に行なわれているのでそれについて述べる。山掘苗は掘取り後すぐ植え付けるのであれば周年可能だが極寒極暑の候を除いて開花直後の４～５月頃か10～11月頃が理想的である。ツツジ類の栽培はさほど難しいことではないが，野生の山掘り苗を育成培養するときは自然環境の急変によって枯れることがあるので注意すべきである。

沖縄で一番問題となるのは土壌である。ツツジ類は水はけがよく水もちのよい土壌が理想的である。したがって砂土や重粘土はさけるべきである。次に土壌の酸度である。ツツジ類の好適土壌酸度は pH4.5～5.5で酸性土壌によく生育する。ツツジ類の自生地は殆んど山地で酸性の瘠薄土である点からもうなづける。土壌の酸度が中性～塩基性になると鉄分の欠乏により葉が黄化し生育が悪くなり開花しないのみか枯死するにいたる。沖縄の土壌は一般に塩基性なので露地植えにすると上記の理由で段々生育が悪くなる。たとい山掘後１年目は開花しても２年目から開花しなくなりそのうちにいつしか枯死してしまう場合が多い。
一般的に沖縄の土壌は重粘土でその上塩基性なのでツツジ類の栽培には不適当である。したがってそれらの欠点を補ってツツジ類を栽培し花をたのしむためには，水苔か鹿沼土を用いて鉢植えにするのが望ましい（水苔，鹿沼土は種苗店や農園で販売している）。本土でツツジ類の鉢植え栽培が盛んに行なわれるようになったのは，栃木県鹿沼地方を中心として掘出される鹿沼土が利用されるようになってから，その栽培が簡易化され培養土に秘訣などという面倒なことがなくなり誰にでも容易につくれるようになったからである。

筆者はパーライト単用の鉢植えにしているがいまのところとりたてる程の欠点は見られない。要するに水苔，鹿沼土，パーライトの単用かまたはそれらを混用して鉢植えにすることが大切である。ツツジ類の愛培家はわざわざ山土を運んで栽培しているが，水苔や鹿沼土を用いればそういう苦労をしなくてもすむし，また全然土を用いないので鉢植えのツツジを室内に持込んでも苦にならない利点がある。

第二に大切なことは空中湿度の問題である。山間部で朝夕は露があり空中湿度の高いところで育っているものを市内の高温と乾燥したところで植えるのだから生育しがたいのは当然で根部にのみ水を与へても無理である。灌水は単に根部のみでなく植物体全体にジョロや噴霧器で一様にシットリ濡れる位に灌水してやるようにすべきである（但し出蕾より開花中はさけた方がよい）。ツツジ類は半日陰でもよく花をつけるがケラマツツジやサキシマツツジは日当りの良い方が花付きはよくなる。しかし強烈な西陽や夏の乾燥は花つきを悪くするのでなるべく西陽のあたらぬ場所で栽培することが理想的である。

鉢植えにすると当然整枝剪定などの手入れが必要となるが，整枝剪定は開花直後より７月上旬頃までに終えるようにすることが大切である。ツツジ類は７月中旬頃より花芽の分化が始まり，翌春の開花の準備をしているので７月中旬以後の剪定は花芽を摘みとることになり花付きを悪くする原因になるわけである。

肥料成分としては三要素の他カルシウムが相当多量に必要だが，石灰・木灰などのように培養土を塩基性に変える性質のものゝ施用はさけるべきで，酸性の肥料を用いることが大切である。一般にツツジ類は地表近くに非常に細かい根が沢山発達しているため濃度の高い肥料を施すと肥料負けしやすいので，化学肥料などは用いない方が安全である。肥料についてあまり神経質になる必要はなく，開花後，７～８月，12月の３回油粕を置肥として与えれば丈夫に育てることができる。

（諸見里秀宰）